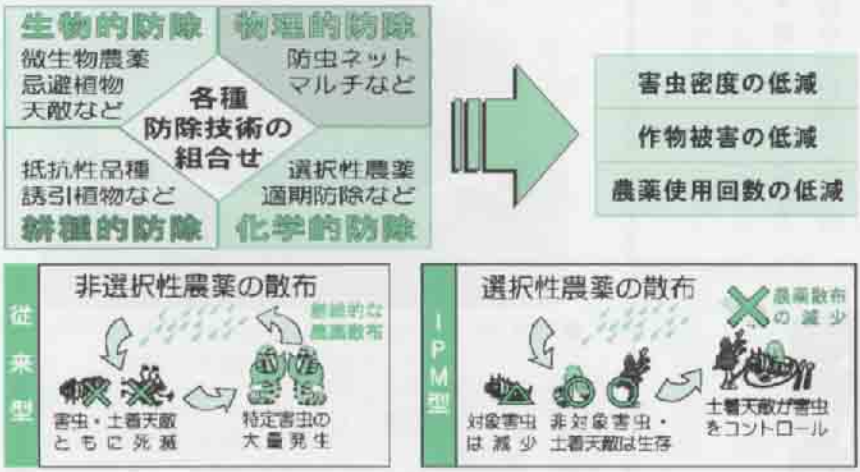
IPMを取り入れた防除について

IPM（Integrated Pest Management）とは、「総合的病害虫管理」と訳され、輪作や抵抗性品種・台木の利用等による**耕種的防除**、天敵昆虫や微生物等を利用した**生物的防除**、光や色、粘着板等を用いた**物理的防除**、化学合成農薬を用いた**化学的防除**を組み合わせ、経済的被害を生じるレベル以下に害虫を減少させ、その低いレベルを維持させるための害虫管理システムをいいます。

化学合成農薬の低減による付加価値の高い農産物の提供や、害虫の薬剤抵抗性発生の軽減、環境保全といった点で近年注目をされています。

自然界では特定の生物が増加すると、その生物を補食する天敵も増加するため、それぞれの生息数は一定のバランスを保っています。しかし、従来の化学合成農薬等非選択性の農薬を散布すると、天敵も減少してしまい本来のバランスが崩れ薬剤抵抗性のある特定の生物（害虫）の大量発生を招くことがあります。

そこで、害虫の発生しづらい環境と天敵の生息しやすい環境を整え、天敵に影響が少ない選択性農薬を使用することにより、害虫の密度を低下させるとともに、その後の発生を天敵により抑制することが出来ます。



大里農林振興センター普及部では、深谷市園芸協会とJAふかや藤沢支店野菜部会とともに、「ナス」でIPMを取り入れた防除の実証ほ場を設置しました。

「ナス」での対象害虫は、アブラムシとアザミウマ類で、おもな天敵はテントウムシとヒメハナカメムシです。ダニ類やオオタバコガなどの害虫の防除には農薬を使用しますが、この2種の天敵昆虫に影響の少ない農薬を出来るだけ選択しました。また、ほ場の周辺には飼料用トウモロコシを植え、風よけとするとともに天敵昆虫の誘引を行いました。

生育期間中、定期的に行った調査の結果、慣行区とほぼ同様の防除効果が得られました。平成16年度はナスの害虫は全般的に少なく、また、藤沢地区は慣行区でも農薬使用量が少なかったため、一概には言えませんが一応の成果があったものと思われました。

平成17年度も引き続き実証ほ場の設置により効果の確認を行い、農薬だけに頼らないIPMを用いた防除方法の検討を進めていきます。

実証ほ場における防除実績

4／3	DDVP乳剤50
4／25	定植：アドマイヤー粒剤
5／25	オサダン水和剤
6／23	コロマイト水和剤
	ロブラール水和剤
7／27	コテツフロアブル
	トリフミン水和剤
8／12	ゼンターリ顆粒水和剤
	アファーム乳剤
8／22	トリフミン水和剤
	アファーム乳剤
9／14	エスマルクDF
	トリフミン水和剤

テントウムシ
アブラムシ類の捕食

ヒメハナカメムシ
アザミウマ類、アブラムシ類、コナジラミ類、鱗翅目害虫の卵、ハダニ類の捕食